
スタートとゴール

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スタートとゴール

【Nコード】

N1633P

【作者名】

風

【あらすじ】

どこにでもいそうなく普通の高校生、迅野直人。彼は高校で陸上競技に出会う。彼は陸上に惹かれて行き、インターハイ優勝を志す。先輩の涙の引退、部員引退の危機、個人種目とリレーの間でも葛藤。直人はこれらを乗り越えることができるのか！？そして彼はインターハイで優勝できるのか！？部活、勉強、友情、恋愛。さまざまな要素を盛り込んだ青春物語。

第一部 一、（前書き）

この度は「スタートとゴール」を読もうとしていただき、ありがとうございます。僕が今中3で受験生ということもあり、更新は不定期ですが地道に更新していきますのでどうぞこれからもご愛読ください。

第一部 一、

夢を見た。それはとてもリアルだったが、同時にあり得ない夢でもあった。なぜこんな夢を見たのか分からないが、それはしっかりと脳裏に焼きついた。

目が覚めた。時計を見る。午前3時40分。…もう1度寝よう。そう思つて目を閉じる。が、眠れない。今見た夢が気になったのだ。自分でも驚くほど細部まで覚えている。夢のことを少し考えていたらいつの間にか意識は闇の中に落ちていた。

「…ちゃん、おい…兄ちゃん！」
「んあ？」

こんな素つ頓狂な声を上げて僕は再び目を覚ました。視界には弟の大河が上下さかさまに移っている。

「兄ちゃんいいのか？」

「ほえ？何が？」

「今7時40分だぞ。今日入学式だろ」

……… ああーーーーーっ！！！！

ソッコーで跳ね起き、朝ごはんの食パンと牛乳を掻っ込む。時計の針はもう50分を刺している。くそ。何でコークー時だけ時間が進むのが早い！？神様は性悪なのか。

「まったく、入学式から遅刻ギリギリだなんて情けないわね。急ぐのはいいけど、忘れ物しないようにしなさいよ？」

母さんにもこう言われる始末。

「だああ！わかってるよ！いつてきまーす！」

家を飛び出して走って学校へ向かう。

今日は4月6日。新たなるわが母校、県立川島北高校の入学式で

ある。なのによりによつてこんな日に寝坊するとは。何でだろうな？走りながら考えていたら、今朝見た夢のことを思い出した。そういえばあの夢みてから気になって眠れなかったんだっけ。しかもすんごい鮮明に覚えている。こんなことつてあるんだなーとか思っていたら学校の門が見えてきた。

校門の前には見慣れた2人の姿があつた。親友の須藤雄太と幼馴染の金城美紀だ。2人の前に着くや否や、

「おせーぞ！つたく高校生にもなつて遅刻かよ」

「情けないんだから」

と注意を受けてしまった。

「ごめんごめん。あ、僕何組だった？」

すると嬉しいことに

「2組。俺と一緒にのクラスだ」

という返事が返つてきた。走つて行つてクラス表を確認すると、確かに迅野直人の名前はそこにあつた。僕の隣には須藤雄太の名もある。すると雄太が

「残念なことに金城美紀殿も一緒だ」

と囁く。それを聞いて美貴が、

「なによおーその言い方は！まったく男子つてホント素直じゃないんだから」

とふくれっ面でいい返す。

「みんな変わつてないね」

と僕が笑いながら言つと、

「何い？お前が一番変わつてないわ！身長も伸びてないしな」

と雄太が言つた。負けじと

「そういう雄太だつて全然痩せてないじゃん」

と反論する。

「はいはい口喧嘩しないの。ほら教室行くよ」

と美紀に言われ僕らは言われるがままに歩きます。

確かに僕の身長は中3時と比べてもほとんど伸びていなかった。

現在152cmである。正直美紀より小さい。さらに正直言つと弟の大河（中2）にも抜かれそう。一方雄太は身長181とデカイ。それに横も結構デカイ。体重は92kgある。いわゆるデブというやつだった。しかし雄太はとても外交的で友達も多く、中学時代は人気者だった。

「ねえねえ、二人とも部活何入るか決めた？」

教室に向かう途中、美紀がこんなことを言った。

「いんや、まだ決めてねえ。直人は決めたか？」

「僕もまだ」

僕と雄太は中学時代文芸部だった。僕は足は速かったのだが、低い身長でスポーツで活躍できる自信がなく、雄太もその太さからくるそれが運動部への入部を渋らせていた。中2の夏に運動部へ転部しようかとも考えたが、ほとんどの生徒が部活を固定化しているときに転部する勇気は当時の僕らには無かった。

「運動部がいいけどな」

雄太がふいに言った。僕と同じ回想をしていたのだろう。

「僕も。部活動説明会はしっかり聞いとかなないと。あ、美紀はもう決めたの？」

すると彼女は自慢げに

「私はチア部に入ろうと思う！カッコよくない！？」

と言う。なるほど。確かに活発な美紀には似合ってるかもしれない。僕は美紀の話を首肯しながらこう考えた。

教室に入るとそこは人でいっぱいだった。同中のグループで話しているのがほとんどである。

僕らが入ってきてからすぐに担任の先生らしき人が入ってきた。予想どおり1年2組の担任で岡田晃と言った。糊のきいた高そうなスーツを着ている35、6ほどの男性だった。爽やかそうが第一印象だった。岡田先生は軽い自己紹介の後、入学式の説明を始めた。僕はそれを聞きながら新しい生活を充実できそうな期待を膨らませていた。

しかし、充実と言っても普通の高校生の範疇である。これからの高校生活がこんなことになるうとは誰も（もちろんこの僕も）予想だにしていなかった。

入学式から3日がたち、次第に教室のテンションも落ち着いてきた。今日は午後の時間を割いて部活動説明会があった。しかし、大部分の生徒はもうどの部に入るか決めているらしく、「なあ、何部に入るか決めたか？」「俺は野球部」「俺はバスケットに入るぜ」などという会話があちこちから聞こえた。僕と雄太はまだ何部に入るか決めてなかったたので、部活動説明会が選択肢を絞る最初で最後のチャンスだった。僕らは真剣な表情で説明を聞いていた。

が、僕はどの部活にも特別興味をそえられることがなかった。どの部活にもビビツと来るものはなかった。説明会が終わった後、雄太のところへ向かう。

「雄太、なんかいい部活あった？」

「……………」

返事がない。それに少し俯いている。

「雄太？」

すると雄太は顔をあげてきっぱりと言った

「俺、決めた」

「え？何を？」

「俺、陸上部に入る」

この発言が僕の高校生活を大きく変えることになるのがわかったのは、まだ先の話である。

第一部 二、（前書き）

この度は「スタートとゴール」を読もうといただき、ありがとうございます。僕が今中3で受験生ということもあり、更新は不定期ですが地道に更新していきますのでどうぞこれからもご愛読ください。

第一部 二、

「俺、陸上部に入る」

雄太がいきなりこんなことを言い出した。口は真一文字に結び、目は決意で爛々と光っている。

「え？いきなりどうしたの？」

「とにかく決めたんだ。明日、仮入部に行こう」

いきなりこんな突飛なことを言われて納得する人間では僕はなかった。慌てて

「ちょ、ちょっと待って！なんでそうなったの！？詳しく教えて！詳しく！」

と説明を要求する。すると雄太はまだ興奮に目を輝かせながらも話してくれた。

俺は直人と同じく興味をそえられる部活を見つけ出せずにいた。

野球部、サッカー部、バスケット部。みな引き締まった体型をして、見るからにスポーツマンである。デブの俺には居場所がないのか。そう思った時。

次の部活が入ってきた。やはりみないい体つきだが、ところどころ違った人がいた。ある人は直人並に背が低かった。ある人は線が細く、スポーツマンに見える体つきではなかった。そしてある人は、俺よりも大きく、そして太っていた。俺はこの部活に急激に興味を惹かれ始めた。なんだこの部活は！？なんでこうもスポーツマン体型じゃない人がいっぱいいるんだ！？そう思っていたら部長らしき人が話し始めた。

「陸上競技部です。僕たちはインターハイ出場を目指して練習に励んでいます。陸上部は、ただ走るだけの部活ではありません。走る以外にも、跳躍種目や投擲種目などがありそれぞれ適性が違います。

陸上部は様々な人——つまり走るのが苦手な人や、太っている人が輝ける場です。ですから運動が苦手な人でもぜひ陸上部に来てみてください」

雷が落ちた。俺の頭の中で何かはじけた。この部は太っているから運動に向かないという俺の常識を見事なまでに粉碎してくれた。彼らは部長のスピーチが終わってから実技を始めた。俺が気になっていた太っている方は5〜6kgはありそうなゴム製の球を軽々と放り投げていた。

カッコいい。気づけばそう思っていた。するとたんに、「俺もこの人みたいにカッコいいデブになりたい」という思いがむくむくと湧き上がってきた。そして陸上部の仮入部に行く決心をした。

「つーわけだ。もちろんお前も来いよ」

「え！？なんで僕も！？」

雄太の話を聞き入っていた僕は我に返り、慌てて聞いた。

「いいだろ。どうせどこに入るか決めてないんだし。それにお前みたいになちっさい奴にも輝く場があるかも知れんぞ？」

確かに正論だった。どうせ断る理由もないので僕は承知し、明日の放課後、陸上部の仮入部に行く約束を交わした。

翌日の放課後、僕は約束通り陸上部の仮入部に行くため陸上競技場へと向かっていた。僕らの通っている川島北高校（通称北高）は学校からそう遠くないところに大きめのスポーツ施設があった。陸上部は時々そこを利用するんだそうだ。

競技場に着くともう部員は揃っていた。僕らと同じ仮入部の生徒も何人かいる。陸上経験者も何人かいたが、やったことがなさそうな人もちらほらいた。やがて練習が始まった。部員はみなアップを始める。今日の仮入部はとりあえず見学だそうだ。

アップを一通りこなした後、部長は見学者に対して、

「これからブロック別に分かれて練習をします。短距離・長距離・ハードル・跳躍・投擲の5ブロックに分かれて行うので好きなところ

ろを見学してください。途中で移っても構いません」

と言って部員に指示を出し始めた。雄太は憧れらしい先輩について投擲ブロックの見学へ行った。僕は特に行きたいところも無かったのでとりあえず1番メジャーで人数も多い短距離ブロックを見学することにした。部長も短距離ブロックだった。彼らは何やら金属でできた棒と足掛けを取り出し、レーンに並べ始めた。後から聞いたのだが、あれはスターティングブロックという名前でスタートするときに使うらしかった。3人がブロックをセットし、調整しだした。スタート練習の準備である。この時点ですでに緊張感が漂い始めているのが素人の僕にも分った。おしゃべりをしていたほかの見学者もしゃべるのをやめて見始めた。

3人の準備が終わった時レーンのそばにいたマネージャーがピストルを取り出し、火薬をいれて構え始めた。そして――
「位置について」

時が半分止まった気がした。しゃべるものも動くものも無く、動いているのはスタートしようとする3人だけだった。彼らはゆったりとした動作でスタートラインに手をつき、大きく深呼吸をし、構える。

「用意」

彼らの腰が持ち上がり、静止した。ほんの一瞬、完全に時が止まったかに思えた。次の瞬間――

けたたましい轟音とともに止まっていた時が動き出す。それと同時に3人は鋭く飛び出し、レーンをもすごい速度で駆けていった。

この時僕にも雷が落ちた。この人たちはこの一瞬、長くてもほんの数秒のために何日も何時間も練習している。そう考えると彼らがとてもかっこよく、輝いて見えた。同時に、知りたくなった。この人たちの追い求めている一瞬、数秒の先には何があるのか？無性に知りたくなった。知りたくて知りたくてたまらなかった。そして、あのとき――入学式の前――見た夢を思い出した。

こうして僕は陸上部への入部を決意した。

家に帰って僕は入部届に部活名と氏名を記入して母さんに出した。母さんは驚きすぎて持っていた食器を落としそうになった。

「あなたが陸上部ねえ…ちゃんとやっていけるの？」

僕は持てる限りの手を尽くして説得した。夢のことは恥ずかしくて言えなかったが。

すると母さんは自分では決めかねて、父さんの判断を仰ぐことにした。父さんはいたって普通のサラリーマンだが、残業が多く、いつも帰りが遅い。午後9時23分、帰ってきた父さんを問答無用でいすに座らせ、説得を試みる。

「んー陸上部かあ。でも陸上するにはそれなりのきちんとしたシューズとスパイクが必要だろ？結構高いんだよな、それ」

ぐ。そうきたか。けれど今の僕はそんなことで陸上部への情熱が揺らぐ様な人ではなかった。

「でも、僕が自分で入りたいと思った初めての部活なんだ。このチャンス、無駄にしたいくないんだ。お願いします!!」

そう言って頭を下げる。

すると父さんはしかめっ面を解いて

「わかった。直人がそういうんならしっかりやればいい。ただし途中で投げ出したりするんじゃないぞ」

と言って入部届に名前を記入し、判子を押してくれた。

かくして僕の陸上部入部が決まった。そして、僕の真の高校生活がここから始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1633p/>

スタートとゴール

2010年11月27日11時10分発行